

全日化の結成と 産別会議の運動

——亀田東伍氏*に聞く（上）

吉田 健二



はじめに

- 1 『産別会議——その運動と展開』について
- 2 保土谷化学労組の結成（以上、本号）
- 3 全日本化学労組の結成（以下、次号）
- 4 産別会議の運動
- 5 質疑応答

はじめに

亀田東伍氏からの聞き取りは、1981年2月16日、東京・お茶の水のホテル錦友館にて、早川征一郎専任研究員（教授）の司会のもとにおこなわれた。亀田氏が事前に提示したテーマは「全日本化学労働組合の結成と産別会議の運動」であり、報告は2回ないし3回が予定されていた。

ところが亀田氏における証言報告は、ご自身が極度の難聴に加えて体調がすぐれない日がつづいたため、研究会への出席が實際上困難となった。このため第2回目の聞き取りは、1981年4月21日、代わって吉田健二（兼任研究員）が東京都練馬区桜台の御自宅を訪ね、後半部分のヒアリングをおこなった。

本稿は、この2回にわたる計7時間半に及ぶ聞き取りを吉田の責任においてまとめたものである。

*亀田東伍氏略歴

1910（明治43年）年9月30日、群馬県高崎市上和田町に、父五郎三、母スエの三男として生まれた。小・中学時代は山室軍平を尊敬し救世軍の少年兵として高崎市で活動した。県立高崎中学をへて、1929（昭和4）年3月東京府立青山師範学校本科を卒業し、同年4月より1940年3月まで10年間、千寿第5小、西神田小などで教諭や訓導として勤務した。この間、1937年3月日本大学専門部高等師範部国語・漢文科（二部）、1940年3月中央大学法学部英法科（同）を卒業した。

1940（昭和15）年4月、保土谷化学工業に入社した。42年4月抜擢されて勤労課長（庶務、文書、厚生）の3係長を兼任）に就任し、44年4月保土谷工場（横浜市）に経理課長、工場長補佐として異動した。

敗戦をへて1945年10月以降、「読売」や「朝日」の記事に励まされて労働組合の結成に取り組み、同年12月

ところで亀田東伍氏は、1952年9月、中華人民共和国への密航・亡命を企て、1956年12月14日に帰国するまで、北京を拠点にアジア人民との連帯活動に専念された。予定された2回目、あるいは3回目のヒアリングにおける重点証言ないし質問事項は、この中国滞在中における活動などの全容に関してであった。本稿においては事情があつて、中華人民共和国への密航の経緯や、亡命時代における亀田氏の活動に関して紹介しないことにした。

なお本稿の編集においては、御子息で、現在長野県茅野市中大塩にお住まいの亀田和東（かめだ・かずはる）氏の協力を得た。ここに記して感謝を申し上げたい。

（吉田健二）

1 『産別会議 ——その運動と展開』について

『産別会議——その運動と展開』の問題

——本日は、全日化の初代の委員長で、産別会議の副議長としても活躍された亀田東伍さんをお招きしました。亀田さんは耳が大変不自由とのことでもあります。それで研究会のやり方ですが、これまでとは違い先に報告を頂きまして、質疑応答は報告終了後、休憩を取りましたのち一括して行ないたく思います。よろしいでしょうか。

なお、本日は、奥様の亀田フミエ（旧姓・猿

渡フミエ）さんがご主人の体調を心配され、付き添いで出席されています。亀田フミエさんは長らく全日化や産別会議の婦人部部長をなさいました。私どもの研究会は、産別会議における婦人部活動につきましては、まだ関係者から聞き取りをしておりません。奥様からも後日、このような機会を得ましてお話を伺いたく存じます。

亀田 本日は、早川征一郎先生、吉田健二先生、旧友で同志だった松尾洋さん、皆さん方のお骨折りで産別会議についてお話し申し上げる機会を与えて頂きました。吉田先生からは、旧産別会議本部の資料中、全日化や産別会議に関

17日、保土谷工場労組を結成して組合長に就任し、また翌46年2月27日、18事業所・1研究所を結集した単一の保土谷化学工業労働組合の結成をすすめ、初代の組合長となった。化学労働者の全国的結集にも尽力し、1946年8月17日、全日化（全日本化学労働組合）の結成と同時に委員長に就任した。

1946年8月19日、産別会議の結成に全日化を代表して参加し、1947年7月10日の第2回臨時大会で副議長となった。この間、1946年8月に日本共産党に入党、1947年4月の総選挙に群馬県から日本共産党の候補として立ったが落選した。

1948年以降、日本の化学労働者の総結集をめざす大化学産業労働組合の組織化に努め、同年9月の結成と同時に副委員長となった。1950年10月GHQの指令により会社をレッドパージされた。日本共産党の50年問題をきっかけとする分裂では徳田球一・志田重男らの「所感派」＝主流派に属し、1952年10月、アジア太平洋地域平和会議への出席を名目に、俳優中村翫右衛門らと中華人民共和国へ密出国した。中国亡命中は同会副秘書長として、世界平和評議会、世界労連執行委員会などに出席し、1956年12月14日に帰国と同時に逮捕された。

1957年2月、日本共産党の本部勤務員となり、平和国際親善部、経済調査部、情報誌『世界政治資料』発行の副責任者を務め、1970年3月に病気のため退職した。

この間、日本平和委員会、日中友好協会、日ソ協会などの役員を歴任した。1997（平成9年）年7月16日脳出血により死去した。享年86歳。著書に『労働組合ノート』（真理社、1948年）、『労働者の政治生活』（同）、『労働戦線の統一』（暁明社、1948年）、『中国の建設——第1次5カ年計画の時代』（岩波新書、1956年）、『望郷』（光文社、1956年）などがある。

する資料を複写して送って頂きました。あらためて感謝申し上げます。

先に、労働運動史研究会編『産別会議——その成立と運動の展開』（労働旬報社、1970年）について、読んだ感想と意見を申し上げます。

この本については、家内から読め、読めと言われていたけれども、これまで読んでいませんでした。本日、研究会で報告するというので準備のために初めて読みました。そして得た結論は、この本は貴重だとは思いますが、内容に関して価値はあまり高くない、ということです。

この本の中で、比較的良くまとめられ、文献として価値があるのは119頁以降に収録されている、産別会議史料整理委員会編「産別会議小史」の復刻版です。多々問題があって、評価できないのは94頁以下、金子健太・杉浦正男ほかが出席しておこなわれた「産別会議の再検討——『産別会議小史』をめぐって」という座談会であります。

この座談会においては、金子健太さんが中心となって話をすすめ、1947年7月10日、産別会議臨時大会における討議と結論について「坊主懺悔」だときき下ろしています。産別会議の自己批判問題に関してはのちにまとめて述べます。金子健太さんは、政党と労働組合との関係について間違っていて理解していますね。

「産別会議小史」のほうも、この点に深く踏み込むのを避けているだけでなく、記述は、日本共産党の失敗を産別会議が引き受けるような形でまとめています。金子健太さんは、この「小史」の問題点に輪をかけて、産別会議における現実の歴史を正直に見る勇気を失っています。産別会議が果たした役割、及び産別会議の運動にはらむ問題は、こんな座談会や、ごまかして回避できる生易しいものではなかったのであります。

木村英雄と「産別会議小史」

亀田 「産別会議小史」は元来、木村英雄というすぐれた活動家を得て執筆を開始し、119頁以降に収録されていますけれども、当初はこの4倍もの分量だった。それを無理やり削って、こんな小さなパンフレットに圧縮させられてしまいました。この「小史」は、ある有力な幹部経験者の意見に影響を受けて発行された経緯がありました。

産別会議が有する資産をいっさい引き継いだ産別会議整理委員会——産別記念会は、東京の1等地に土地・家屋もあるという金持ちで、ビルも持っていたわけですから。僕は招待されて2回、パーティに出たことがありました。じつに贅沢なパーティでした。

産別会議にあんなに金があるなら、なぜ木村英雄さんに腕を振らせなかったのか。木村さんは、掘り下げた分析のうえに、産別会議運動の特徴や、意義と限界を緻密に検証したでしょう。

事実、彼は日夜、産別会議の運動を検証していました。木村さんは、レッドパージで勤務する大学を失って、活動の立脚点とする足場＝職場をなくしてしまい立場が弱かった。木村さんは1950年前後に、生活に大変困ってしまい、いまでいうアルバイトで産別会議の事務局員を務めました。

木村さんは産別会議の書記連中のうちでも実に有能な人でした。仕事ぶりのみならず、渉外においても誠実で謙虚な人柄で知られていた。たぶん産別会議の歴代のボス連中に、生活費の点から責めあげられて、言いたいことを言えなかったに違いない。僕はこの「小史」を読むと、木村さんが「ああ（執筆を——編者注）抑えているな」ということがわかるのです。

木村英雄さんは、当時の日本共産党内においては、まれにみる優れた共産主義者でありまし

た。ことにストライキという実践指導においては、じつに頭脳明晰で緻密な指揮官でした。彼は、大牟田中学を卒業、どこかの高等学校をへて青山学院大学を卒業した珍しい経歴の持ち主です。英語のほか、仏語、スペイン語も話す語学力がありました。

木村さんは、ビルマ戦線の生き残りです。軍隊内においては終始一兵卒でありながら、作戦や戦術においては、中隊長さえ彼に頭が上がらなかったという緻密な頭脳の持ち主でした。彼は作戦の変更、これは撤収を意味すると思いますが中隊長に進言したと言っていました。これは、軍隊に籍を置いた人にはその偉さがよくわかると思います。軍隊は一兵卒の人の話なんか聞きませんよ。中隊長が木村さんの意見を受け入れたというのは、合理的で、必要不可欠な作戦であったからですよ。

木村さんは、この『産別会議——その成立と運動の展開』に収められた「小史」を書いた後、縁あって総評の教宣部の仕事をするようになり、総評14単産の組合史を書きました。木村さんは、総評で定年となったのちは散り落ちて、静かに死んで行きました。まことに惜しい人だった。

残念なことに、日本共産党の『赤旗』は木村英雄さんの死去を報道しなかった。産別会議の第3代目の議長だった吉田資治さんと僕が『赤旗』編集局にその訃報を掲載するよう2、3回、いやそれ以上督促したのですけれども、とうとう載せなかった。たぶん共産党の地区委員会が、木村さんの職業の意味や仕事をきちんと掌握していなかったのでしょう。木村さんはいつの間にか規約でいう「12条該当党员」として処分されてしまっていました。

けれども木村さんはこのことに文句をつけるような人ではない。木村さん自身、50年問題など日本共産党が明らかに間違えている事態の

ときでも、承知の上で共産党を信じていて、歴史の限界というものを知っていた。木村さんは、日本共産党をオール・マイティとして考えていなかったし、産別会議を美化しようとも思わなかった。彼は、後世における事実の検証を重視していましたね。

ところがこの座談会では出席者の1人、金子健太さんが、産別会議の幹事会や執行委員会における決議や臨時大会における決定を「坊主懺悔」だと激しく非難していますね。こんな根拠のない発言では、真実がかき消されてしまう。問題の本質も明らかにならない。

以上の点から、この『産別会議——その成立と運動の展開』を採点しますと、収録されている「小史」が80点、座談会がマイナス40点、結局プラス・マイナス40点くらいのものだと思います。

今、思い出しました。木村英雄さんの大牟田中学は三池中学の誤りでした。家内が大牟田高等女学校を卒業していますから、勘違いをしました。

このような問題が現実にあります。だから産別会議の運動を研究される先生方は、どうか「産別会議小史」と一緒に、日本共産党の50年問題や、日本共産党の第7回、第8回大会などの文献と合わせて研究してください。どちらの文献に依拠しても、客観的な歴史は書けないでしょう。爆弾に火を付けた人間のことに触れないで、爆発という現象だけを書けば、それはやはり自滅でしょう。

産別会議の研究

亀田 本日の研究会に先立って松尾洋さんから、証言においては産別会議に対する現時点での評価も述べよ、との電話がありました。遠慮は要らないということでもありましたね。けれども僕が産別会議の運動について話し、これを

評価するには限界があります。まず僕自身、勉強が足りない。また話しを裏付ける文献・資料が手元にない。

産別会議の運動を顧みる場合、僕にとりましては、産別会議が結成されて以来、執行委員として、幹事として、また副議長として、毎日克明に書き記していた5年間の記録——大学ノート30冊余がありました。これが、日本共産党が50年問題で分裂中、僕が1952年9月に日本共産党の指示で中華人民共和国に非合法的に出国・亡命する前に、警察のガサ入れを予想してみな焼いてしまいました。証拠をもたない証言者は言葉に力がありません。

なお、産別会議に多少とも関連するノートと若干の資料は、別の場所にファイル6冊ですがどれも保管してありました。これらは大原社研へ寄贈することにします。

もう一つ、本日の証言が躊躇された理由は、僕が1952年9月に中国に非合法的に出国して以来、ちょうど28年たちました。僕は1956年12月14日に帰国し、羽田空港で公安刑事に逮捕されました。

けれども帰国してから本年度24年になりますが、僕はこの間、在外活動についてはもちろん、産別会議の運動に関してもいっさい口を閉ざしてきました。本日は、僕にとりまして半ば24年間の黙秘を解いて話す初めての対外的な発言となります。

昨年（1980年）10月に、松尾洋さんを通じて、大原社研の研究会で証言をするようにとの申し出がありました。この4か月、家内の助けを借りて必死に準備をしました。家内や松尾さんの励まし、また吉田先生のご協力を得て、本日はこうして何とかお話しできますことを幸いに存じます。けれどもなお準備不足は否めない。僕自身、記憶も薄れています。問題や疑問がありますならば、遠慮なく指摘してください。い

つでも訂正をします。個人の見聞、評価、記憶には最初から限界があります。

2 保土谷化学労組の結成

保土谷化学工業に入社

亀田 僕は元は教師でした。高崎中学をへて、東京の青山師範学校を卒業して千寿第5小、西神田小などの教員や訓導を10年間勤めました。この間、二部（夜間）の課程ですが、日大専門部高等師範部の国語・漢文科を卒業しました。もう一つ、僕は、人間と社会を統治する法律に関心がありまして、中央大学の法学部英法科を卒業しました。そして、労務行政系の教授の推薦を得て保土谷化学工業の入社試験に合格し、卒業と同時に入社しました。

僕は入社試験のときの面接で、社長や重役連中から好印象をもたれた。磯村乙己社長から「会社を頼むよ」とも言われて有頂天になり、僕は「よし」という気持ちで入社しました。入社して配属されたのが本社の総務部で、2年後に抜擢されて勤労課長となり、庶務、文書、厚生の中の三つの係長を兼ねました。

僕は本社の勤労課長として、工員の労務対策や徴用工を含む厚生関係を受け持っていました。ところが今、手元に経歴書がないので何月何日と申し上げられませんが、昭和18（1943）年春に社長から急きょ呼ばれて、保土谷工場の経理課長として頑張ってくれと言われ、当時、本社工場と呼ばれていた、横浜市保土ヶ谷区の保土谷工場に異動となりました。

この保土谷化学工業における主力工場、あるいは屋台骨とも言われた工場現場に異動したことが、僕に労働者というものの実態を現実に教えてくれたわけです。人生の第一の分かれ目はここにありました。僕にとっては労働運動の原点であります。

戦時中の保土谷化学工業

亀田 保土谷化学工業の歴史と労働組合の活動に関しては、1971年3月26日、保土谷労組の組合役員向けに講演してこれに加筆したパンフレットがあります。これは自家本で30部製作しました。本日はこれをベースに話します。松尾さんには1冊、献呈する約束になっていますね。

—— そうですね。

亀田 近日中にお送りいたします。さて、1945年8月15日、満州事変以来つづいた15年戦争が終わりました。この時点で、保土谷化学には18工場・事業所と研究所があって、東証1部にも上場されている日本でも有数の化学工業の会社です。財閥に属さない興銀系の化学メーカーで、苛性ソーダ、硫酸、染料、各種の添加剤を生産していました。

会社は戦争中、軍需工場として膨張しました。終戦時、保土谷工場だけでも、勤労働員者すなわち徴用工や学徒動員者を含めて3,000人を超えていました。

この保土谷工場では海軍のゼロ・ファイター、ご存知ですね「零戦」です。この「零戦」の航空用ガソリンに入れるアンチノック剤などを一手に生産してしまっていて、軍が管理する工場になっていました。

このため保土谷工場は、徴用工や学徒動員の最優先工場となっていて、また緊急有事に備えて近隣家屋の強制撤去を申請し、いわゆる建物疎開のことですが、横浜市保土ヶ谷区の何分の1かは保土谷工業が手に入れて資産を膨張させました。工場周辺の土地を、戦争という非常事態を理由に権力を利用してただ同然で手に入れたわけですね。

僕は経理課長として赴任したのですが、工場長を補佐して、本社にいたときと同じ勤労部門も担っていて不眠不休の毎日でした。毎年8月

15日が近づきますとなぜか戦争中のことが脳裏に浮かび、亡くなった先妻や、育ち盛りの子供たちには苦勞をかけてすまなかったと思うのであります。

「読売」「朝日」の記事に鼓舞

亀田 保土谷工場労組の結成は、1945年12月17日です。この日は、新しい衆議院の選挙法が公布され、明治以来いくたの運動を重ねて、日本女性の願望だった婦人参政権が制度として確立した日にあたります。また全国18工場・事業場を結集したオール保土谷、すなわち単一労組としての保土谷化学工業労組の結成は翌年、1946年2月27日です。

保土谷工場労組の結成は、オール保土ヶ谷においては富山工場（1945年12月1日）に次いで早く、2番目で、これに主力工場の一つの郡山工場（1946年1月19日）がつづきます。

なお、単一のオール保土谷労組が誕生しますと、横浜の保土谷工場労組は保土谷支部となるわけです。僕は保土谷工場労組＝保土谷支部の初代の組合長で、オール保土谷でも初代の組合長となります。

次に、労働組合結成の条件や背景を述べましょう。保土谷工場労組の結成は、基本的には自然発生的でありましたけれども、職員、技師、研究職の人がいち早く動き出したことに特徴があります。本来なら、待遇や労働条件が職員と比べて劣悪な工員などが先陣を切っただろうと思われるが、保土谷工場の場合、工員の立ち上がりは鈍かった。これはなぜなのか——研究上の論点でありますね。

労働組合の結成へ向けて勇気づけられ、一步僕を突き動かしたのは「読売」や「朝日」の記事でした。日付などのメモはしていないけれども、読売新聞社では1945年10月くらいに経営幹部の退陣や待遇改善を求めて争議が起きてい

ますね。新聞は逐一、争議を報じていました。

この「読売」における争議報道が僕にとりましては決定的でありました。「読売」の新聞労働者は真っ向から経営陣と対峙し、戦争責任を追及し、また組合を結成して待遇改善を勝ち取りました。

「朝日」の労働者においても同じような動きがありましたね。「朝日」の労働者は社員大会を開催して、経営幹部の戦争責任を追及し、幹部を総退陣させました。そして、「朝日」の労働者は「宣言」（1945年10月23日付「国民と共に立たん」の記事のこと——编者）を発して再出発しました。こうした闘いの上に「朝日」にも従業員組合ができました。

経営幹部に対する戦争責任の追及の声と人権確立の要求が、戦後の日本における労働組合運動の原点でありました。そして、戦後日本の労働運動は「読売」や「朝日」の新聞労働者の決起によって端緒が開かれたのです。

「読売」や「朝日」の新聞労働者は実に偉いと思いますね。新聞を通じて日本をデモクラシーの国家として、あるいは平和な国家として再建するためには労働組合を結成しなければならない、デモクラシーの日本を担うのは労働組合であると結成を鼓舞する記事を連日掲載していました。繰り返しになりますが、僕らはこれらの記事に鼓舞されたのです。

労働組合の結成について、GHQが各事業所を回ってこれを直接指導したと書いている本が多々あります。けれども民主化政策の一環として、GHQが組合結成を奨励はしても、各工場・事業場を回って個別的に、また直接に指導したという事実はないと思いますよ。保土谷工場にはGHQの担当将校、労働組合課の将校は来ませんでした。

僕らはむしろ、1945年12月から翌46年春にかけて労働組合における怒濤の如くの結成は、

「読売」「朝日」の争議や、これに「毎日」を加えた新聞労働者の啓発記事が大きな影響を与えたと考えています。違うでしょうか。この点、どうかご指摘頂きたい。

1946年2月、オール保土谷の結成大会のとき、全国の工場・事業場から組合結成のリーダーとなって担った連中が上京して来ました。彼らは前日や前々日に上京して、保土谷工場の施設に宿泊して情報交換をしましたが、福島県の郡山工場からやって来た代議員はスクラップ帳に「読売」や「朝日」の記事を糊付けしていました。

総同盟系の指導者に相談

亀田 僕がまず実行したのは、工場内に労資一体の勤労組織として存在していた産報（産業報国会）と労働組合はどう違うのか、組合の必然性と固有性とは何か、どのような手続き・手順で労働組合を結成するのか、これらに関して確かな知識や情報を得ようと思いました。

そこで、僕は東京帝大の化学を出た浜口という技師と一緒に、保土谷工場の近くに住んでいた、かつて社会民衆党员だったという人を訪ねて労働組合の目的や意義、仕組みについてたずねました。

彼は不勉強だったようで、要領の得ない話だった。けれどもただ一点、勉強になりました。それは、産報が戦争を推進するための勤労組織、ないしは生産増強を担うための労資一体の組織で、今問題になっている労働組合ではないということだけはわかりました。

次に、工場の近くに、大正デモクラシー期以来、大山郁夫先生のもとで活動をしていた佐藤賢治という、のちに神奈川県で日本社会党の議員になった人ですけれども、彼を訪ねて労働組合というのは一体どのような組織なのか、労働組合の目的や役割は何か、などについて教え

てもらいました。

佐藤氏はさすがでしたね。彼は戦前の無産政党では左派の労働農民党に属していたようです。彼から、労働組合の意義や結成の仕方、また労働組合の規約の事例を見せてもらい大変勉強になりました。また前後して、保土谷化学に産報ができる以前、会社側に立って組合を結成したメンバーの一人、荒川徳松という相撲取りのような体格の人からも話を聞きました。

僕と浜口氏が訪ね歩いて話を聞いた人物は、労働組合としては総同盟系の人ばかりでした。日本共産党系の関東労協（全関東地方労働組合協議会）はまだ結成されていなかった。だから保土谷工場労組は、当初、総同盟系の労組として設立されたのです。僕と総同盟との関係についてはのちにも述べます。

ともあれ、労働組合の結成が日本を再建するための基本条件であることは、「読売」「朝日」の記事のみならず、佐藤氏も説いていて、産報とは違う労働者の自主的な組織で、権利確立や待遇改善、職場の民主化のためにも必要だということがわかりました。

労働組合結成の要因

亀田 僕はこの間、当時どのような条件・背景があつて労働組合が結成されたのか、オール保土谷を事例に考察してメモを取りました。労働組合結成の条件や背景に、会社の業態や工場・事業場の規模、あるいは地域性や歴史性の問題も反映しているかもしれない。オール保土谷の場合は、5点ほど挙げられると思います。このほか見落としている点がありましたら教えてください。

第1点は、保土谷工場労組の場合、即時かつ大幅な賃上げの要求がありました。戦争が終わって1945年10月か11月以降、僕の体験的な記憶では猛烈なインフレーションが起きました。

た。これまでの給与だけでとても生活ができない事態のなかで、賃金引き上げは、職員も工員も生きるための切実な要求となっていた。

日本は当時、敗戦で戦争経済がストップし、また清算する過程にありました。民需経済はまだ立ち上がっていなかったし、民需生産への移行があつてもごく初期の過程にあつて、闇経済が横行していましたね。生活必需物資が、文字通り毎日、高くなり、職員や工員とかいう身分に関係なく、給与や当日の日給ではコメがなほども買うことができなかった。工員は主食の米はおろか、副食品も融通しあう生活だった。僕らは社宅で、米や麦、乾麺、また味噌・醤油の貸し借りをしていたのですよ。

こういう問題もありました。米や麦を買う金があつても、運配や欠配が常態化していました。労働組合は、米寄せ闘争や魚や野菜の共同購入を通じて結成された経緯がありました。先生方は想像できないでしょうが、保土谷工場労組が最初に取り組んだ仕事は、青森の漁業組合からホッケを何トンか購入してこれを組合員に分けたことでした。ところが到着が遅れ、ホッケが一部腐って工場内に、特有なホッケの臭いが充満して大変困りました。

もちろん組合が結成されたからといって、われわれの生活が維持・改善されるという保障はない。けれども労働者の生活を誰がどのように守るのか——それは労働組合であろう、ということになりましたね。生活を賄う賃金引き上げの要求こそ、労働組合結成のエネルギーになっていたと思います。

第2は、復職の要求です。保土谷工場の場合、終戦と同時に徴用工や学徒は動員解除となりました。当然、現業労働者も生産がストップしたため管理部門や保守部門をのぞいて相当な人数が解雇された。これら被解雇者の復職要求が、保土谷工場のみならず、郡山工場、横須賀工場、

鶴見工場、王子工場（東京都北区）に広がっていました。大分県の佐伯工場では工場閉鎖という措置が計画されていました。

当初、保土谷工場における復職の要求は、工員が個々に行なっていた経緯がありました。本社として、復職の基準を示していなかったのだけれども、工場の事情で若干の復職を認めていた。操業再開へ向けて態勢を整える必要があったからです。そんなことで、いったん整理解雇された職員や工員が大勢、復職を要求しましたが、一部にあやしい事例があったのです。

現場労働者の要求の一つは、正しい基準で復職を認めてくれというものでした。この復職要求に対しては、労働組合を結成してこれを協議し、合理的な基準で会社側に要求してくれ、という声が強かったのです。

第3は、生産再開の要求です。これは第2の問題とも関係しますね。まず職員や工員の不当・不合理な整理解雇を、会社側に対してどのような手立てで撤回させるか、また撤回させたのちにどのようにして生産の再開・復興をはかっていくかが重要な課題となっていました。

当時、経営者は一般論として、工員を一挙に解雇したこともありまして、あるいは材料や原料を継続的に購入できない事態があったこともあって、生産再開に躊躇していました。

保土谷工場の場合、多少、原材料のストックがありました。これをアミノ酸醤油など本来の生産品目とはちがう、いわば日銭を稼ぐような代替品の生産をおこなってクビをつなぎ、本来の軌道における生産態勢が確立するまで待ちました。先生方には信じ難い話であろうけれども、当時は、物資をストックしているだけでも相当な値上がりが見込めたのですね。僕らはそのストックを工場側の了解を取って、代用の製品をつくって何がしかの収入を得ていた。

とにかく、労働者は働く職場と生活を確保す

るため、生産を本来の軌道に乗せなければならず、組合も過半の責任を担って、生産復興に取り組む必要があったのです。

労働組合が生産再開や、経済復興を叫び、これを要求したところに敗戦直後における労働運動の特徴があるのではないのでしょうか。これが労働組合運動の原点でありました。「俺を働かせろ」「働けるだけ賃金を寄せせ」——これが組合運動の原点でありました。

第4は、社員と工員の身分差別の撤廃です。これは工員の側から提起されました。保土谷工場の場合は、社員と工員の出入り口が別々になっていました。入口も離れていました。また工員の場合、退出に際しては現在で言うポデータッチの身体検査がありました。

身分差別は具体的に、保土谷化学工業の規程として、職員、準職員、雇員A（中卒・勤続5～8年）、雇員B（同・以下）、工員の5段階に分かれ、工員から職員への昇進ないし異動などはもちろんなかった。「社員」という呼称がありましたが、この場合の「社員」は基本的に職員と準職員をさしていました。

僕は中央大の法科のとき、ドイツなどヨーロッパにおける職場秩序、あるいは労働倫理の重要性を学びました。ドイツでも社員と工員に超えられない壁があったのですね。

社員と工員、及び雇用上の地位を歴然と分けていたのは帽子の線です。保土谷化学の場合、社員は帽子の白線1本が主任、2本が係長、3本が課長です。ふざけて僕に対して「3本さん」と呼ぶ工員もいました。

工員は赤線で、1本が副組長、2本が組長、3本が工手でした。また着帽は構内においては絶対の義務だった。帽子の線が白線か赤線かで職員と工員が区別され、また線が何本あるかでどのくらいの地位なのか歴然とわかりました。

保土谷化学で職員と工員の整理解雇が行われ

たのは、1945年の9月から10月にかけてですが、当時、保土谷工場の門前で「首を切るな」と並んで、「工具を社員にしろ」「赤線をなくせ」といったピラが撒かれました。「赤線をなくせ」とは「白線」に対する「赤線」で、これはシンボリックな表現です。これは工・職の差別支配を撤廃せよ、と同意語ですね。

門前や構内で撒かれたこの種のピラを集めて記録・分析するのは、工場の総務課長や勤労課長の務めなのですが、僕は、本社で勤労課長をしていた関係上、個人としても撒かれたピラを集めてスクラップ帳に貼っていました。

このスクラップ帳は6冊ほどわが家に残っています。当時を記録する資料としては貴重ではないでしょうか。現在、保土谷労組が35年史（『明日にむかって——保土谷化学労働組合三十五年史』1982年発行）を編纂している最中で、見せてほしいとの申し出があり貸し出しています。返却され次第、これも大原社研に寄贈したいと思います。

第5に、新しい賃金体系の確立が工員から出されていました。これは第4の問題の裏返しですね。この賃金体系や労務体系に関しては、僕らは組合を結成したのち、経営協議会の議題に乗せて経営側と協議しました。賃金基準や賃金査定合理性は、きわめて大事なテーマでありました。

保土谷化学工業の場合、賃金体系は、大正5年の創業から社員は月給制であり、終身雇用のもとで年功・昇進の賃金制が採用されていました。専門学校卒以上の準職員が月給制、雇員が日給月給制、工具は日給制、という基準でありました。

僕が本社の勤労課長としてまず研究したのは、保土谷化学における賃金の仕組みに関する問題でした。工具は基本的に日給制だった。また請負賃金というのも職種によりましてはあり

ました。戦後直後における労働運動では、これらの差別や矛盾を撤廃して、全員一律に月給制にするという賃金体系が要求されていたのですね。

ところで終戦に伴う従業者の解雇は、保土谷化学では、工具や請負工員が先に行われました。幸いに保守部門などで整理解雇されなかった工員においても、職員に比べて賃金基準、手当支給、福利厚生、退職手当その他、大変な差別がありました。

保土谷化学における賃金体系は大正5年以来変わっていなかった。とにかく職員と工員の賃金の格差を是正し、これを撤廃して、言うならば職務給や生活給としての、誰もが納得する合理的で、平等的な賃金体系を求めたのです。これが翌年1946年の電産争議をへて「電産型賃金」として認知され、一つのモデルを形成するわけですね。

占領期の日本労働運動における主勢力は工員層でした。工員のエネルギーはすごかった。この工員のエネルギーを主体に、職員層の要求と合体して激しく燃え上がりました。占領期の日本労働運動は、こうした賃金差別や身分差別が闘争の原動力になっていたのではないのでしょうか。占領期の日本労働運動は、賃金、待遇、身分、退職時における差別の解消——これが爆発したのですよ。違いますか？

終戦翌年の1945～46年に、日本労働運動は読売争議にしろ、東芝争議にしろ、電産争議にしろ、あるいは1947年の2・1ゼネストにしろ、すごいエネルギーとなって盛り上がったのは、明治以来の資本家による差別賃金や差別労務体系、これを解消して対等平等の処遇を求めたからじゃないでしょうか。

だからこの第4と第5の問題は、まとめると労働における平等性をめざしたもので、敗戦をへて高まったデモクラシーの機運のなかで出さ

れた、まさにデモクラシーをめざす画期的な要求でありました。1960年の安保闘争以降における日本社会の平静さと安定は、第4と第5の要求が満たされたから、中途半端な形で展開されたのではないのでしょうか。

保土谷工場労組——総同盟系労組として結成

亀田 保土谷化学工場労組すなわちオール保土谷の保土谷支部は、総同盟系の組合として誕生しています。

日本の労働組合は1946年8月、ナショナルセンターとして産別会議と総同盟に二分されて結成されますね。僕自身、当初、総同盟の理念や本質について理解していたわけではなかった。たまたま接触したのが総同盟の関係者であったに過ぎない。

けれども戦前、保土谷工場に産報が誕生する以前、保土谷工場は総同盟系の組合として存在したようです。そして、厳しい職制の労働支配のなかにも自主的な活動が多少はあったのですね。僕が接触した一人荒川徳松という人は、総同盟曹達支部の保土谷工場の役員でした。

また保土谷工場は、新興の京浜工業地帯において1920年代以来、工場進出とともに社会民衆党や総同盟の根拠地の一つとなっていた背景がありました。総同盟のなかでも、京浜工業地帯は活動が活発に展開された地域で、工具のうちにも総同盟系の組合員がそれなりの人数でいたようです。

要するに保土谷工場は、総同盟の工場としての背景や土壌があったのですね。だから総同盟に好意的な組合員もいたでしょう。僕は記憶は漠としていますが戦争が終わって、総同盟の関係者が工場の門前で整理解雇の反対ピラを撒いているのを見ています。

僕自身、保土谷工場の組合長として、総同盟に加入するという意思表示をしていない。第一、

加盟する場合、機関に諮らなければなりません。加盟の件に関しては組合大会にかけていないし、事前に相談や働きかけも一切受けていなかった。だから保土谷工場労組が総同盟に加入し、僕が神奈川県連の執行委員となったという新聞記事を読んで、本人がまことにびっくりした。

世間は新聞記事を読んで、僕らの組合を総同盟系の組合として認知したはずです。総同盟の県連が保土谷工場労組について「わが陣営の組合」として宣伝し、県下における勢力拡大の流れをつくろう、という意図を込めていたのは確かでしょう。

事実、京浜工業地帯に、横浜船渠、東芝、日本鋼管、旭硝子などがありますが、保土谷工場労組は神奈川県でも有数の大工場で、実際に加盟した場合その加盟は、県域のみならず、日本全体の労働陣営の勢力図にもなんらかの影響を与えることが予想された。総同盟県連はその影響力を考えて、僕らの組合を勝手に加入扱いとしたのでしょうか。

社会党神奈川県連の執行委員に就任

亀田 僕が心に反して正式に社会党に入党し、神奈川県連の執行委員となった理由は次のような事情からです。

1946年4月10日、戦後最初の総選挙が実施されましたね。その総選挙に、中央大の同期で、弁護士をしていた中山という者が郷里の栃木県から日本協同党の候補として立ちました。僕は2回ほど、足利市と宇都宮市での彼の演説会にオール保土谷の委員長として応援演説をしました。

当時、栃木県は船田中（ふなだ・なか）も日本協同党から立候補し、日本社会党からはのちに社会党の幹部となった戸叶武の妻が公職追放となった夫の身代わりで立って、激しい選挙戦

となっていました。

ところが応援演説が終わって横浜に帰ってきたら、組合事務所が大変な騒ぎになっていた。オール保土谷の委員長で、しかも総同盟神奈川県連の執行委員が日本協同党の候補者の応援演説をするとは何事か、ということだった。

当時、総同盟神奈川県連は、社会党の県連と組織的に直結していました。僕は総同盟から責められた。僕は前月（3月）に、勝手な言動が多いとして殴られた経緯がありました。そして今回の不始末です。

結局、僕は「忠実な黨員になる」という心がない誓約書を書いて、年間分の党費50円を払って正式に社会黨員になった。だから僕の社会党への入党は強制されたもので不純だった。入党しなければ僕自身、オール保土谷の組合長の足元を覆される可能性があったのですね。

けれども社会党というのは、機関紙もなければ（日本社会党の機関紙『日本社会新聞』は1946年1月1日に創刊されている——編者注）、会合も指導もない。僕は1946年8月、日本共産党に入党してからも、しばらくは社会黨員と二重の党籍をもっていた。このことは、社会党に関する情報収集の点でも大変役にたったのです。

さて、総同盟と社会党の神奈川県本部が僕を執行委員として外部に発表したのは、保土谷工場労組のみならず、オール保土谷労組の委員長としての存在を無視できなくなり、僕の名前を利用したかったのだと思いますね。

保土谷化学の工場は全国に18工場がありました。主力工場は保土谷工場ですが、同じ神奈

川県でも横須賀、鶴見、矢向などにも工場があり、また地方にも郡山工場、小名浜工場、大分県佐伯工場などがあつた。郡山工場などは従業員が3,000人余の規模で、このほか工場が所在する各県においても保土谷化学の工場は有数の工場であつた。

総同盟の神奈川県連や日本社会党の県連は、こうした問題も考慮して、僕の名を——名声ではありませんよ、肩書を利用したのだと思います。

この点も紹介しておきます。僕は総同盟神奈川県連から招集があつて1回だけ、1946年4月、活動方針を検討する執行委員会に出て、県連会長の土井直作氏と書記の天池清次氏という人に会いました。

土井直作氏に関しては、僕はまったく知りませんでした。当時名前すら聞いたことがない。後で調べて知ったのですが、土井氏は、日本労働界では大変有名な方であつた。彼は、大正期から京浜工業地帯を地盤に活動したプロの労働運動家で、1946年4月の戦後第1回の総選挙において当選し、社会党の代議士となっています。代議士の身で、総同盟県連の会長でした。天池清次氏は、のちに総同盟——同盟中央の幹部になりました。

僕は、土井氏や天池氏の尊大ぶりにまず驚きました。また執行委員会中における2人の話し方や、議事の進め方、質疑応答の仕方を見聞していて、ぜんぜん労働者としての肌合いが感じられなかった。とくに僕が驚いたのは質疑応答がなかったことです。土井氏は質問を遮っていましたね。（つづく）